

◆問題事例のまとめ①【ゲーム中に起こった問題について】◆ (平成16年度～令和2年度)

女子予選会場でタイブレイクに置いてサーブの順番を間違えた。(平成16年度)

問題点

元に戻す際の指示についてどうすべきか。

今回の措置

正しい位置に戻し、それまでのポイント有効にして再開。(ルールに基づいた今後の対策)

(ルールに基づいた今後の対策)

「テニス規則27誤りの訂正」に基づいて処置

男子会場で、ジャッジに抗議をした選手がロービングアンパイヤーを呼び、ロービングアンパイヤーがコートに入り対応。その後そのポイントをレットとして試合を再開した。(平成16年度)

問題点

ロービングアンパイヤーが間違った指示をして、試合が進行してしまった。

今回の措置

カウント40-40に戻し試合再開した。しかしその後、その該当校の関係者(見学者)から本部にクレームが入り、ゲームをいったん止められた。そしてすぐにの会場校の担当からレフリーに連絡が入った。レフリーからはルールについて説明し、ジャッジ通りで進めて下さい(イン、アウトについては覆らない)と指示をしたが、その時点ですでに、2ポイントほどゲームは進んでいたために、そのままゲームを続行させて下さいと指示をした。

(ルールに基づいた今後の対策)

ルール上ではイン、アウトについては覆すことはできない。しかし今回ケースのようにロービングアンパイヤーがレットの指示をし、その後ゲームが進行したのであればそのロービングアンパイヤーの指示が最終となり、ポイントに戻して訂正することはできない。ただルールとは違う形で試合は進行してしまった。今後については来年以降のロービングアンパイヤー講習会でもう一度ルールの確認を行いたいと思う。(参加してもらえなかった顧問の先生に問題有り)

ただし今年度のロービングアンパイヤー講習会で、参加していただいた先生でしっかりとオーバールールをとったり、フットフォルトをとったりできる先生も多くなってきているのも事実である。

女子会場でロービングアンパイヤーに入った先生がプレーの邪魔になったが、どうしたらいいかわからない。(平成16年度)

問題点

ルールではロービングアンパイヤーのポジションについては明記されていない

今回の措置

特になし

(ルールに基づいた今後の対策)

ロービングアンパイヤーはパーマnentファクスチャとならないために、プレーに支障がある場合、移動を要求する事ができる。

女子ダブルス本戦でイン、アウトのジャッジについてジャッジを明確にしていないことからそのポイントについてどう扱うかもめた。(平成16年度)

問題点

今回はジャッジをしないまま(ハンドシグナルも、声によるジャッジも無)アウトと判断したために起こった。

今回の措置

実際にはロービングアンパイヤーのポジションからもアウトのように思われたが、選手が全くジャッジしていなかったため、ショットを打った選手も、ロービングアンパイヤーもグッドと判断したと思ったが、その後でさっきのはアウトだったと主張。ロービングアンパイヤーが入り、ジャッジがなかったことを説明してグッドでポイント加算して試合を再開。

(ルールに基づいた今後の対策)

ジュニアを経験している選手は、ジャッジを明確に行わないことがある。今回のケースはその事から生じた問題だと考える。近畿大会前に行うセルフジャッジ講習会で再度徹底していく必要があると考える。

(フェアアンパイヤーのつかない試合規則 2選手の義務 2-2)

個人戦において選手が試合中に鼻血を出した。(平成17年度)

問題点

インジェリータイムはどうするのか、また時間内に鼻血が止まらなかった場合はどうするのか。

今回の措置

治療のためにコートから一度離れ治療した

(ルールに基づいた今後の対策)

本来であればインジェリータイム内に止まらない場合は、それ以後の時間についてはタイムバイオレーションとなりポイントペナルティー

となる。しかし今回については、鼻血が止めることを再優先とした。これについてはレフリー裁量で判断する事ができる。通常の怪我と異なり出血についてはケースバイケースとなる。但し出血が続いている場合、プレーをさせることができない。

女子ダブルスでポイント間で必ずバックのフェンス際まで下がって打ち合わせするペアがいた。(平成17年度)

問題点

ポイントタイム20秒以内には行われているが、毎回のように相談をして進行を遅らせている。

今回の措置

意図的に20秒間をフルに使おうとしていると判断したために、タイムバイオレーションをとった。

ルールに基づいた今後の対策

規則29に基づいて20秒意図的にフルに使うと、倫理規定のポイントペナルティーの対象となるため、注意を喚起していく必要がある。

選手が鼻血を出したが、ロービングアンパイヤーが確認しようとしたところ、本人が見せるのを拒否した。(平成17年度番外1)

解釈

本来ルールでは本人が拒否すること前提としてつくられていないが、怪しい場合は確認しても良い。

相手ボールを返球したときに、完全なチャンスボールとなったために、「まいった」と大きな声を出したために、相手選手が打つのをやめてしまった。(平成17年度番外2)

解釈

打たなかったことに関しては、そのプレーヤーの失点となるが、声を出した行為については、コードバイオレーションとなり警告となる。

高校総体京都府予選においてセルフジャッジで、アウトコールが早すぎた。(ボールが地面に落ちる前にコール) (平成18年度)

問題点

選手がボールデッドになる前にアウトジャッジをしたために、その後ボールがグッドだった場合ジャッジをくつがえしたことになる。

今回の措置

エンドチェンジの際に注意を行った。

ルールに基づいた今後の対策

ルールには特に触れる部分がない。しかしトラブルになりやすいために今後の注意を行う。

ダブルスの試合中、セカンドサーブを打った後に隣からボール入ってきたために、サーバー側の選手がレットをかけた。(平成19年度)

問題点

セカンドサーブをフォルトだったために、本来であればダブルフォルトとなるが、この場合レットとして扱うかどうか。

今回の措置

レットかけたのがサーブが打たれた後だったために、ダブルフォルトととして試合再開。

ルールに基づいた今後の対策

ルールブックp40「試合で起こるQ&A Q11」に従う。

シングルの試合中、一方の選手が打ったスマッシュをもう一方の選手がアウトコールをしたが、打ち返してきたためにスマッシュを打った選手が再びボレーをし、そのボールはアウトとなった。その時アウトコールをした選手が再びアウトコールを行った。(平成19年度)

問題点

コールが明確でなかった。アウトコールをしたのにもかかわらず、その次のショットに対してもアウトコールを行った。

今回の措置

アウトコールをしたかどうかの確認を行い、コールがなされていたことから、最初のジャッジを有効にし、試合を再開した。

ルールに基づいた今後の対策

今回の場合、ジャッジを変えたと見られる部分もあったがコールの確認もされているので、特にその点についてはふれなかった。

が、不十分なコール等については指導していく必要があると思う。

ダブルスの試合で、サーバー側のボレーヤーがサーバーと同じサイドに立っていた。(平成19年度)

問題点

間違ったボレーヤーが、自分たちの失点と考えた。

今回の措置

今回の場合については何もルール違反になることはない、間違った(実際には間違いといえない)ボレーヤーは意図がありその場所に立っていたわけではないので特に問題はない。

ルールに基づいた今後の対策

特になし

ダブルスのゲームでネット前にいたプレーヤーが、ベースライン付近のボールをアウトジャッジした。(平成19年度)

問題点

ベースライン付近にいた選手はジャッジをしていないのに、ボールから離れていた選手がジャッジしている、プレーヤーでジャッジが食い違っているとも考えられる。

今回の措置

ネット際のプレーヤーのジャッジが怪しいということから、相手選手から要請があり、ロービングがコートに入り、明らかなミスジャッジについてはオーバーコールを行った。

ルールに基づいた今後の対策

「ルールブック P49 4)」に従う。

ゲーム途中ゲームかアドバンテージが分からなくなった。(平成19年度)

問題点

競った試合の中でお互いがアウトコール、カウントコールを明確に行わなかったことが、今回の原因。

今回の措置

1ポイント確認できない不明確なポイントについては無効にし、それ以外を有効にして、アドバンテージで試合を再開した。

ルールに基づいた今後の対策

カウントが分からなくなった場合は、確認できるポイントを有効として、確認できない部分はレットとする。「ルールブックP49 10)」に従う。

大会でQFからは8ゲームと決められていたが、6ゲームでゲームを終わらせてしまった。(平成20年度)

問題点

本来は試合途中であるにもかかわらず、勝手に試合を終了させてしまった。

今回の措置

60で双方とも試合終了を確認してしまった事から、60リタイアで扱った。

ルールに基づいた今後の対策

特になし

プレー中鼻血を出した。(平成22年度)

問題点

出血による中断がMTO(メディカルタイムアウト)の対象になるか

今回の措置

MTOとして対応し、2回目以降はタイムバイオレーションとなることを選手に伝える。

ルールに基づく今後の措置

出血については、コートを汚すような場合、プレーは再開できない。

相手がリターン体制をとっていないのに、サーブを打つ選手がいた。(平成22年度)

問題点

ネットレディーの対象となるか

今回の措置

選手がネットレディーを申し出ないので、そのまま進行させた。

ルールに基づく今後の措置

サーバーはセルフジャッジの場合現在のカウントをコールして、相手がリターン準備の準備ができていないか確認してからサーブを打たなければならない。但しリターン側の選手が、リターンをしてしまったり、取ろうという姿勢を見せてしまったら、打たれたサーブは有効となる。

ポイントの確認食い違いがあった。ファイトポイントが微妙なジャッジであったことから、アウト、グッドの確認ができずそのままゲームが進行した。その際ロービングアンパイヤーが選手のアウトジャッジを見ているが、プレーヤーはお互いに確認していない。(平成22年度)

問題点

一部分ロービングアンパイヤーが確認している。

今回の措置

確認できるポイントで再開。ロービングアンパイヤーは一部確認できる部分もあったが、そのコートに常駐しているわけでないので、双方の確認で再会。但しその際にプレーヤーとしての義務を果たすように注意を行う。(カウントコール、アウトジャッジ等)

ルールに基づく今後の措置

セルフジャッジにおいて、サーバーはサーブを打つ前にカウントコールをしなければならない。またアウトジャッジにしてもまずは声を出してジャッジをしなければならない。選手の義務を怠った事が今回の原因であることから、双方に注意を行う。

本来なら1セットタイブレークマッチの試合が行われる試合が、6-6からスタンダードゲームで行われた。(平成22年度)

問題点

タイブレークゲームが間違っただけでスタンダードゲームで行われた時の措置。

今回の措置

そのままスタンダードゲームで行い。8-8になった場合そこからタイブレークをするように指示。結果は8-6で終了した。

ルールに基づく今後の措置

タイブレークゲームを間違っただけでスタンダードゲームにしてしまった時には、1ポイント気づいた場合はすぐに元に戻し、それまでのポイントは有効にする。但し2ポイント以上進んだ場合、スタンダードゲームで進行させ、4ゲーム終了した時点で並んだ時にはタイブレークゲームに戻す。

ゲームが5-0で終了した。(平成22年度)

問題点

本来のルールであればまだ試合が終了していない。

今回の措置

双方の先週が承諾している中で、握手まで終わっている状況なので。スコアは5-0で記録した。

ルールに基づく今後の措置

本来はあり得ない事である、もしあったとしたら。5-0で負けている選手の棄権扱いで5-0RITとなる。

一方の選手がネットプレーでエースを決めたが、もう一方の選手が隣のコートからボールが入ってきたのでレットを要求した。(平成23年度)

問題点

レットをコールしたのが、相手選手が完全なエース級のショットを打ち終わった後だった。

今回の措置

ボールが隣のコートから入ってきた事実はあるが、それを分かっている、レットを要求した選手は返球している、その球を決められている事から、そのレットの要求を無効とした。

ルールに基づく今後の措置

レットはいつでも要求できるわけではなく、レットを要求するのであれば自分が打つ前にコールをしておかなければならない。また相手が明らかにノータッチエースとなる球を打たれた場合、それはレットにならない。

相手選手が打ったドロップショットを打ち返しノータッチエースとなったが、ドロップショットを打った選手がノットアップを主張した。しかし返球した選手はノットアップをしていないと主張した。(平成23年度)

今回の問題点

双方の主張が食い違っていて、ロービングアンパイアーも確認できる位置にいなかった。

今回の措置

確認できる人間がいない事からセルフジャッジのルール通り、ノットアップは無かったと判断。

ルールに基づく今後の措置

セルフジャッジの場合ネットを挟んで双方でジャッジを行う。その際ノットアップ、フットフォルト、タッチなどについては確認できなければ、事実起こってないと判断する。但し相手の主張に対して対戦相手がそれを認めれば、覆る事がある。

団体戦順位戦において、4ゲームマッチで行われていたゲームで、形式を間違えてスタンダードゲームで行われた。(平成23年度)

今回の問題点

間違ったスタンダードゲームをどう対処するか。

今回の措置

ルールに従って2ゲームアップするまで試合を進め。6-6になった時点でタイブレイクに切り替えるように指示をした。

ルールに基づく今後の措置

今回のようにタイブレイクゲームを間違えてスタンダードゲームで進行させてしまった場合、タイブレイクを行わなければならないゲームから最低4ゲームは行わなければならない。今後もルールに基づいて行っていく。

タイブレイクの最初のサーブをバックサイドから打って、以後そのまま試合を進行させた。(平成23年度)

今回の問題点

タイブレイクのサーブの位置の間違いをどう訂正するか

今回の措置

ルールに従って場所の間違いについては直ちになおさせて、試合を再開させた。

ルールに基づく今後の措置

今回のようにタイブレイクのサーブの打つ位置を間違えた場合、直ちに正しい位置に戻して再開するとある。今後もその方向で進める。ただしタイブレイクがこれだけ浸透しているにもかかわらず、バックサイドからタイブレイクは始めるといった指導を受けている選手がいることをもんだいにすべきかも。

ダブルスの試合中、前衛の選手がポーチボレーに行った際にラケットにボールが触れたように思い、相手選手が今のはタッチだとポイントを要求した。しかし当該選手は触れていないと主張。(平成24年度)

今回の問題点

相手のタッチについて、対戦相手がジャッジできるか。

今回の措置

完全に確認されていない事象なので、セルフジャッジのルールに基づきジャッジ通りに進める

ルールに関する今後の措置

セルフジャッジのもとでは、タッチについては、ロービングアンパイヤーが確認できていない事象は無かったことになり、相手選手がロービングアンパイヤーに確認することはできるが、ジャッジをすることはできない。

男子シングルスで、サーブを打った選手が、打ったボールがネットに当たったと思い、レットを主張した。(平成24年度)

今回の問題点

サービスレットをサーバーが主張したこと。

今回の措置

レシーバーがサーブルレットを認めていないために、レットがなかったこととしてゲームを再開した。

今後の措置

サービスレットについては、セルフジャッジにおいてはレシーバーが判断できるが、サーバーからの主張に対して、レシーバーが認めればレットになる。今後もルールに従って対応する。

ゲームカウント5-5でタイブレイクゲームを行い、何ポイントか進んでしまった。(平成24年度)

今回の問題点

スタンダードゲームを行わなければならないのに、間違っでタイブレイクゲームを行った。

今回の措置

それまでのポイントを有効にして、サーブの順番を間違っした時と同じ方法で、修正してゲームを再開させた。

今後の措置

規則27 間違いの訂正に従って、対処する。

シングルの試合中、レシーバーが相手がセンターフォルトをしているとして、フットフォルトを主張した。(平成24年度)

今回の問題点

セルフジャッジの試合でレシーバー側のプレーヤーがフットフォルトを主張した。

今回の措置

本来フットフォルトはプレーヤーはジャッジできない、疑わしい場合は、ロービングアンパイヤーに要請して監視をしてもらうように指導する。

今後の措置

不明確な点や問題が生じた場合はロービングアンパイヤーに申し出るように指導する。また、ルールの徹底を行う。

ラリー中に、ボールがネットの白帯の部分にあたった。その時にシングルスボールが倒れた。(平成24年度)

今回の問題点

インプレー中にシングルスボールが倒れたりした場合、レットとなるというルールがあるが、その際にコードで入ったボールをプレーヤーが捕れず、ウィニングショットとなってしまった。

今回の措置

本来、インプレー中にシングルスボールが倒れた、センターベルトが外れた等の事象が起こった場合、すぐにレットとなるが、今回相手プレーヤーが捕れなかった事から、そのショットを有効とした

今後の措置

ルールではすぐにレットとなるが、そのショットがウィニングショットであればレットは取り消されるとある。今後もルールに従って対応する

8プロの試合で第13ゲーム7-7のスコアで間違っタイブレイクを行い、3ポイントが終了した時点で間違いに気付いた。(平成25年度)

今回の問題点

本来スタンダードゲームで進行させなければならないところを、タイブレイクゲームをしてしまった。

今回の措置

3ポイント終了時に気がついたために、その3ポイントがしっかり確認できたことから、サーブの順番の間違い、と判断し4ポイント目からは正しい位置に戻して再会させた。

今後の措置

本来、間違っタイブレイクゲームをした場合、1ポイントで気付けばスタンダードゲームに戻す、2ポイント以降に気付いた場合はタイブレイクを行うとあるが、今回のように、ポイントの流れがはっきりしていて、尚且つどちらかの取ったポイントが3ポイント以下の場合、今回のような処置をしていいとある。基本はルールに従って対応する。

3セットマッチの試合で、第1セットタイブレイク中に(3-3)の時にトイレットブレイクを要求した。(平成25年度)

今回の問題点

タイブレイクのエンドチェンジ時に要求したこと。

今回の措置

緊急を要する場合で無い限り、トイレットブレイクは取れないために、コートに戻して試合を再開させた。

今後の措置

トイレットブレイクは1試合に1回(5セットマッチでは2回)と定められていて、セットブレイク時に取るがある。但し緊急を要する場合はゲーム終了後の自分のサーブの前にとることができる。今後もルールに基づいた措置を取っていく。

相手プレーヤーが打ったチャンスボールをボレーをした時に、ポイントが決まる前に声を出した。(平成25年度)

今回の問題点

取りに行こうとしたが、相手選手の声が気になり追いかけるのをやめたとの主張

今回の措置

相手の主張は、妨害行為にあたるということであるが、放たれたボールを妨害行為があったと判断して打たなかった場合、取らなかったプレーヤーの失点になる。今回の場合もそれに相当すると考えられる。(ルール確認済み)。そのことより声を出すという行為は警告等の対象にはなるが、ポイントは取れなかったほうの失点である。

今後の措置

今回と同じように、ルールに基づいて対応する。

サーブがネットにあたった後、レシーバー側のプレーヤーに直接当たった。(平成25年度)

今回の問題点

レットになるか、レシーバー側の失点になるか。

今回の措置

レットになる(ルール確認済み)

今後の措置

今回同様の措置

ラリー中、相手選手がハンドシグナルをしているように思い、プレーを止めてしまった。(平成25年度)

今回の問題点

ボールを打つ際、左手を挙げて打つために、ジャッジをしているのか紛らわしかった。

今回の措置

セルフジャッジの場合、どんな状態であってもボールを止めればプレーは止まります。本来は自分の側のコートのみジャッジしか行えず。ボールを止める場合は声とハンドシグナルを行ってからでないと止められない。今回についてはボールを止めた方の失点となる。

今後の措置

アンパイヤーのつかない試合では、イン、アウトの判断はネットを挟んで自分側限られる。

サーブを打った際にボールがネットに当たりセンターベルトが外れた。(平成26年度)

今回の問題点

そのサーブがネットに当たってフォルトになったとき、ファーストサーブから始めるのか、セカンドサーブになるのか。

今回の措置

今回の場合、セカンドサーブがフォルトだったので、ダブルフォルトということで処理をした。

今後の措置

サーブがネットに当たりその際にセンターベルトが外れたり、シングルスポールが倒れたりした場合

ファーストサーブなら	
フォルトの場合 ↓ ファーストサーブから	レットの場合 ↓ ファーストサーブから
セカンドサーブなら	
フォルトの場合 ↓ ダブルフォルト	レットの場合 ↓ ファーストサーブから

*ルールとして上表の様な扱いになる。今後もルールに従って行っていく。

ゲームカウント5-3の時に勝っている選手が、痙攣を起こした。(平成 27 年度)

今回の問題点

痙攣によるメディカルタイムアウトは取れないが、コンシードを宣言して、相手にエンドチェンジまでのゲームを譲る事はできる。これを選手に伝えて良いか。

今回の措置

アドバイスでは無くルールの説明なので特に問題なし。

ルールに関する今後の措置

ルール講習会等で確認していく。

試合に、学校の体操服のハーフパンツをはいて試合をした選手がいた。(平成 27 年度)

今回の問題点

ゲームウェアでないものを着用して試合をしていた。

今回の措置

ゲームウェアでない事が確認された時点で着替えるように指示をした。

ルールに関する今後の措置

今後もドレスコードにしたがって指導していくが、試合途中で着替えさせる事はできないために、出席時とロービングアンパイヤーの確認を徹底していく。

サーバーがセカンドサーブを打つ前に、となりのコートからボールが入ってきた。サーバーは気づかずにセカンドサーブを打ったが、レシーバーはレットであると判断した。ただその際に結果的にはリターンをしてネットにかけたような形になったために、サーバー側が抗議した。(平成 27 年度)

今回の問題点

レットと判断したのに、リターンをしたこと。

今回の措置

レットにてサービスをやり直し、試合を再開。

ルールに関する今後の措置

問題はレシーバーがどう判断したかである。レシーバーはレットと判断したことから、打つ意思がないと判断できる。結果的にリターンをネットにかけたような形になったが、その前の時点で、プレーは止まっているので、レットという判断ができる。

試合がタイブレークとなり途中でカウントがわからなくなった。(平成27年度)

今回の問題点

一方の選手だけが結果的に間違っていて、もう一方の選手、観客はわかっていた。

今回の措置

双方の確認が取れないことから、確認できるポイントで再開した。

ルールに関する今後の措置

ロービングが入って最終的に確認できるポイントで再開させるという事に関しては何等問題がない。ただ今回の場合、観客がこの問題に対して、関わってきたことから混乱が生じた。観客は一切のジャッジについても関わることはできない、プレーヤーも観客からいかなるアドバイスも受けることはできない。今回ゲーム終了時に、観客及びその関係者から不適當な発言、行動等があった。今後はこういった行動を慎むべきである。

ダブルスにおいてきわどいジャッジになり、一方の選手は確認できず、もう一方の選手がジャッジした。そのことで相手選手からクレームがついたが確認できなかった選手が、アウトと改めてコールした。(平成28年度)

今回の問題点

ダブルスにおいては一步の選手がジャッジをすれば良いとなっている。実際に一步の選手が確認できなかったとして、何もコールしなくても一方の選手がジャッジをすればいいのではあるが、見えていない選手が改めてアウトコールをしたために、ジャッジの変更になるのではないか。

今回の措置

セルフジャッジの基本原則に従い、アウトで対処。

ルールに関する今後の措置

ルールに照らし合わせると、明らかにジャッジの覆しにあたる。ロービングが確認できていれば、覆した方の失点となる。

ロービングに対してコートを監視して欲しいと要請があり、そのコートの専属のロービングアンパイヤをしていた時、きわどいジャッジに対し、ロービング確認したところロービングの位置からは、明かでないことから、ジャッジに従うように指示をした。(平成29年度)

今回の問題点

ロービングアンパイヤ全てのラインを確認できない事への不満

今回の措置

ロービングが確認できない位置だったためにジャッジを有効とした。

ルールに関する今後の措置

ロービングアンパイヤは試合が順調に進んでいるか。セルフジャッジがしっかり行われているかを確認する仕事でチェアアンパイヤーとは違う。よって確認できないことについては責任が持てない。ジャッジをすることが仕事ではない。この事を踏まえてセルフジャッジの試合をしっかり行えるように選手に伝えていく。

アンダーサーブを打つ際に地面に一度バウンドさせてからサーブを打っていた。(平成29年度)

今回の問題点

有効なショットかどうか。

今回の措置

ロービングアンパイヤー注意をせよ。

ルールに関する今後の措置

地面にバウンドさせるとフォルトになる。

個人戦でボーラーを外してほしいという選手からのリクエストがあった。(平成30年度)

今回の問題点

ボーラーをつけるかどうかは、ローカルルールで決められている事からどう対処すればいいのか。ちなみに京都府では個人戦においても各所属団体から 1 名はボーラーを出しても良いと決められているが、

今回の措置

プレイヤーに拒否権があると言う主張だったが、そのボーラーが問題となるような行動、たとえば妨害行為等があり、プレーに支障があるような場合については退場を指示することもあるが、本部の判断で特に問題ないと判断し、そのままボーラーをいれて試合を続行した。

ルールに基づく今後の措置

ボーラーは試合を円滑するために存在するものである。そのために京都府では各所属団体から 1 名はボーラーを出しても良いというローカルルールを決めている。自分のチームからボーラーを出さないのは自由ではあるが、相手に出さないでほしいというリクエストはこのルールの趣旨に反すると考える。

向島会場において、選手がポイントを取るたびに大きな声を上げていたので、本部からもう少し声のテンションを下げるように注意した。その際に、基準を示すように要望された。(平成30年度)

今回の問題点

向島会場が近隣住民からの苦情が多く、声についても、会場から控えるように言われている。

今回の措置

本部にいる役員の総意のもと、声のトーンを下げるように指示する。

ルールに基づく今後の措置

該当側の主張は、今後チームで指導する際に目安となるものを示してほしいと言う点と、プレースタイルに影響するというものである。プレイヤーの声については、自分自身を鼓舞するものであれば、ある程度認めているが、対戦相手に向けられるものは指導していくという方針である(関西ジュニア等)。ただ声についてはその該当コートだけでなく、隣接するコートのでプレーしているプレイヤーにも影響がある。それに加えて会場によっても条件が異なることから、基準を示すことは難しいと考える。よって判断については、そのときの状況を総合的に判断して、本部が最終判断として決定する。

オープニングの時間になっても選手がコートインをしなかった。そのことで本部で協議した結果、W. Oとした。(平成30年度)

今回の問題点

当該校の監督が自分の時計では時間になってないと主張。

今回の措置

今回の事についてはルールに基づいて処理されている。

ルールに基づく今後の措置

時間計測は基本ロービングアンパイヤーが行う。しかし今回の場合、本部の確認が取られている。これでは誤差が生じる。オフィシャルクロックを用意することは当然ではあるが、まずはロービングアンパイヤーが責任を持って時間管理をするように徹底する。

**ゲームカウント5-5で間違っただのゲームでタイブレイクを行い、ゲームを終了させた。
(平成30年度)**

今回の問題点

ゲームカウントを間違っただのまま終了させた。

今回の措置

6-5では終了していないので、試合を再開させてスタンダードゲームで行わせた。

ルールに基づく今後の措置

今回と同じように、ルールに従って対応していく。

ダブルスの試合の際にインプレー中にダブルスのパートナーが声をかけていた。(令和2年度)

今回の問題点

ルール改正で、パートナー同士の声かけについても言及されており、一応は禁止となっている(あまりにも目立つ場合については警告の対象となる場合もある。)

今回の措置

特になし

ルールに関する今後の措置

この事例に限ると、明らかに行き過ぎた声かけのように思える。チャンスボールがあがったら「落ち着いて丁寧に」など明らかにアドバイスといえるような声かけであった。すべての試合を監視することができないが、同じようなことが起こった場合ルールに従って、処理していく。

試合の際に一方のチームがゲームウエアでない服装で試合をしていた(令和2年度)。

今回の問題点

違うウエアで試合が行われてしまった。

今後の措置

今回はそのままのウエアで試合を成立させた。

ルールに関する今後の措置

ロゴチェックやウエアの確認は試合前にロービングアンパイヤが行わなければならない。公立校大会ではロービングアンパイヤをつけることができないので、監督が行うことになっている。試合開始前にその確認ができず、試合が始まってしまったためにその試合は、服装が認められたことになる。